

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：34421

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04786

研究課題名(和文) 幼児教育保育における食育の実践的指導力を評価する指標の構築

研究課題名(英文) Development of Indicators for Assessing Childcare Workers' Competence in Food and Nutrition Education

研究代表者

進藤 容子 (Shindo, Yoko)

相愛大学・人間発達学部・教授

研究者番号：00259532

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、保育者に「食育実践力」を身につける効果的な養成教育や研修に不可欠である「食育実践力」を評価する指標の構築を目指した。

評価の視点を得るため保育者及び幼児食育研究者を対象に調査を行い、結果の分析から、「食育実践力」は知識そのものよりも、そのような知識に興味をもち、知りたいという思いや態度が重要と考察した。そこで、意欲や態度の把握と、評価対象者が評価を通して食育に必要な事柄に気付けることに重点を置いて、「食育実践力」評価ツールを設計した。保育者による本ツールを用いた自己評価試行の結果、本ツールは、自己研鑽を強化する研修プログラム開発に活用できることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

保育者は、子ども理解に基づき適切に食育のねらいを設定し、計画、実践できる力としての「食育実践力」を身につけることが必要である。本研究では、「食育実践力」は知識そのものよりも、知識に興味をもち、知りたいという思いや態度が重要であることを見出した。そこで、意欲や態度を把握するとともに、評価を通して評価対象者に気付きを促せることに重点を置いて、「食育実践力」評価ツールを設計した。試行の結果、本ツールは自己研鑽を強化する研修プログラム開発に活用できることが示唆された。本研究の成果から、食育実践力向上に活用できる評価ツールを提案することができたことから、社会的意義があったと考える。

研究成果の概要(英文)：Our study aimed to develop assessment indicators for evaluating the 'practical competency in food and nutrition education,' crucial for effective training and professional development of childcare workers.

Through surveys targeting childcare workers and researchers to obtain evaluative perspectives, we concluded that the 'practical competency in food and nutrition education' relies more on the interest, awareness, and attitude towards acquiring such knowledge, rather than the knowledge itself. In light of prioritizing the comprehension of motivation and attitudes, as well as fostering the awareness of essential aspects in food and nutrition education among the individuals being evaluated, we developed an assessment tool for evaluating the 'practical competency in food and nutrition education'. Self-evaluation by childcare workers using the tool suggested its potential for enhancing self-development in training programs.

研究分野：食教育

キーワード：幼児教育 保育 食育実践 指導力 評価 自己評価 研修

1. 研究開始当初の背景

日本の食事情の問題、家庭の教育力低下などを背景に、2005年に食育基本法が制定された。生きる力の基盤を培う時期である幼児への食育はとくに重要であり、「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」にも食育が明記された。

幼児教育保育現場での直接的な食育実践者は保育者(幼稚園教諭,保育士,保育教諭)であり、保育者には食育の実践力が不可欠であるが、必ずしも保育者が食育の実践力を十分に備えているとは言えない。その要因として、食生活経験や保育者養成に課題があると考えられた。そこで我々は、養成教育における課題を明らかにし、対策を検討する必要があると考え、既存科目の内容・方法、課外教育などに注目し研究を進めていた。その際、食育実践に必要な力を「保育所における食育に関する指針」(厚生労働省,2004)等、公的な文献や先行研究を参考に想定して検討したが、「食育実践力」をはかる評価指標がなく、効果的な提案をすることが困難であった。幼児教育保育での食育実践報告も散見されたが、実施内容と方法に関するものがほとんどで、資質面での言及が少なく、食育に必要な力の評価指標が示されていないためではないかと考えた。

このような背景から、学術的な「問い」を、「幼児教育保育における食育を適切に実践できる力やその育成に関する課題分析、保育者養成教育、保育者研修等の在り方検討にあたって不可欠となる評価指標の構築ができるか」として、本研究を着想した。

2. 研究の目的

本研究では、幼児教育保育における食育実践に必要となる力を明らかにし、そこから評価指標を構築、提案することである。さらに「食育実践力」育成に有効なツールを提供し、保育者の資質向上に貢献することを目指す。なお、本研究では、「食育実践力」を、単に食育活動を円滑に実施できるだけでなく、子ども理解に基づき適切に食育の目標・ねらいを設定したうえで、子どもに豊かな体験を重ねられる食育を計画、実践できる力とする。

3. 研究の方法

(1) 保育者及び幼児食育研究者を対象とした調査

評価の視点を得るため「調査A:保育者を対象とした食育実践及び食生活、食知識に関する実態調査」、「調査B:幼児食育研究者を対象としたインタビュー調査」を実施した。

調査A:保育者を対象とした食育実践及び食生活、食知識に関する実態調査

調査は質問紙によるもので、配布質問紙は1000部、回収件数は770件であった。調査時期は2017年11月~2018年1月である。質問項目は、『食育の内容・方法の重視度』(31問),『食育のねらいの重視度』(29問),『食生活に関する意識や行動』(27問),『食に関する知識や技術』(33問)とした。調査Aの結果から、食育実践の内容、保育者自身がかつ食に関する知識や意識などについての実態を因子分析等により把握し、各因子間の関連を考察した。さらに属性に分けた分析により、「食育実践力」の形成プロセスを考察した。

調査B:幼児食育研究者を対象としたインタビュー調査

研究者4名を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。調査時期は2018年3月~5月である。結果はKJ法により分析し、専門家からみた食育実践に必要な保育者の資質を考察した。

(2) 「食育実践力」評価の視点整理と評価ツールの開発

(1)の成果から「食育実践力」評価の視点を整理し、「食育実践力」評価ツールを開発した。評価ツールの実効性を確認するため、保育者対象に自己評価を実施した。実施時期は、2022年2月~3月で、文書で依頼しWebでの回答とした。依頼件数200件、回答件数53件であった。

4. 研究成果

(1) 調査Aの結果から

全体の傾向

『食育の内容・方法の重視度』では、全般に食事場面の重視度は高かったが、生産、加工、購入、廃棄や再利用といった、「食べる」以外の食に関するプロセスを体験するような内容や方法の重視度はあまり高くなかった。『食育のねらいの重視度』では、「食べ物に興味をもつ」や「共食を楽しむ」の重視度が高く保育者に共通した視点として定着していると思われた。一方、「食べ物ができるまでを知る」は低めであった。『食生活に関する意識や行動』では、食品表示を確認したり、数値を活用したりするなど、正確な情報を収集し、活用するといった行動や意識は低いことが示された。『食に関する知識や技術』では、「食事バランスガイド」、「日本人の食事摂取基準」、「4つの食品群(4群点数法)」、「日本型食生活」といった「やや専門的」で日常生活での活用場が少ないものは、知識が定着しにくいことが示唆された。

因子の関連

『食育の内容・方法の重視度』は、『食育のねらいの重視度』と関連が深かった。保育者自身の「食意識・食行動」と食に関する「知識」は相互に影響しあい、食育の「ねらい」に影響を与えた。特に「やや専門的」な知識は、「食に関わるプロセス全体の体験」重視との関連があった。

『食育のねらいの重視度』では、「食事規律習得」「食に関わる身体発達や健康的食事行動」「命のつながりや感謝の気持ち」「料理・調理への関心」の4因子を見出した。「食事規律習得」因子には、「好き嫌いなく食べる」や「残さず食べる」が含まれていたが、「好きな食べ物が増える」は、「食に関わる身体発達や健康的食事行動」因子に含まれ、視点が異なることが示唆された。

「保育所における食育に関する指針」に保育所の食育で目指す子ども像の一つとして「食べたいもの、好きなものが増える子ども」があるが、「好き嫌いなく食べる」、「残さず食べる」が、この子ども像とは異なるとすれば、食育の理解から設定したねらいではなく、習慣的な保育になっている可能性が考えられた。また、「食事規律習得」因子は、保育者個人の「食意識・食行動」や「知識・技術」との相関がみられなかった。以上から、「食事規律習得」因子には、あたりまえの保育となっていて、食育の視点からみて不適切なねらいも含まれる可能性が示唆された。

『食に関する知識や技術』は、「食事援助」などの日常の保育から習得できるものもあるが、「やや専門的」で日常生活での活用場面が少ないものは、保育者自身の「興味、関心、必要感」が習得を促しているようであった。「興味、関心、必要感」は、「季節への感性」とも関連があり、資質として通じるものと考えられた。

形成プロセス

日々の保育に不可欠な事項については保育・教育の経験年数の影響がみられたが、その他にはあまり影響が見られなかった。保育所の保育者には食に関する知識と食育実践とに関連が見られたが、幼稚園の保育者ではその関連があまり見られなかった。また、食事場面の指導は若い保育者ほど重視度が高い傾向にあった。食に関する知識について、「やや専門的」なものは、日々の生活や保育・教育の経験だけでは身に付きにくいことが示された。一般的に、食に関する知識や関心、主体的な食への関りは年代とともに高くなり、特に、40歳代以上で高い傾向にあった。

(2) 調査Bの結果から

幼児食育研究者は、「保育所における食育に関する指針」を踏まえ、具体的な体験の積み重ね、食に関するプロセスの体験や子どもの発達の特性に沿った内容・方法を重要視していた。食育を構想し実践するには、保育者自身が食を大切に思い興味をもつこと、知識の習得が必要であることを指摘し、必要な知識として、食事内容の理解（栄養・食品の基礎）、子どもの発達に関する知識、ガイドライン等の資料を参照できる知識などが挙げられた。

(3) 「食育実践力」評価の視点の整理

調査結果及びその考察から、保育者の資質に関連する次の3点に注目した。日々の保育に不可欠な事項については関心が高いが、食育に必要なではあるが日々の保育では得にくい知識を積極的に習得し、食育実践に活かすという面については不十分であることが示唆されたこと。自身の食生活に関心をもって主体的に関わる保育者ほど、食育実践が豊かになる傾向があったこと。自然への関心、季節と生活との関連への興味といった「季節への感性」は、食への興味、関心、必要感との関連があるとともに、指針等においても食の循環、環境への意識が重視されるようになっていること。

また、食事援助において子どもにとって最も良いことを判断するためには、子どもの食に関する心身の発達理解の重要性を意識することが必要と考えた。

これらの考察から、「食育実践力」の評価の視点を以下に示す5つとした。

季節と生活への興味や関心	保育者自身の食に関する興味や関心	保育者自身が主体的に食生活に関わる意識や態度	食に関する子どもの発達の正しい知識への関心
正しい情報を収集し食育に活かす意識や態度			

このほか、習得している知識や技術と食育実践との関連も示唆されたが、所属施設別に分析したところその傾向が異なっていたことから、「食育実践力」は知識や技術そのものよりも、そのような知識に興味をもち、知りたいという思いや態度が重要だと考えた。

(4) 「食育実践力」評価ツールの開発

意欲や態度を把握できること、評価対象者が評価を通して食育に必要な事柄に気付き、意識の変容が図れることを目指し、「食育実践力」評価ツールを開発した。評価ツールは、「1.知識・興味編」、「2.意識・態度編」、「3.自己評価記入欄」からなる。

「1.知識・興味編」について、各自がイメージする知識内容には差があるため、「知識の解説資料」を添付した。これによって、評価の正確さを図るとともに、評価ツールに回答することを通し、食育に必要な知識に気付くことも意図した。また、「1」、「2」での評価を通して気付きを促すことが主眼であるため、「3.自己評価記入欄」の記入にあたっては、「1」、「2」の項目の意味と評価の視点がわかるよう「評価結果の見方」を添付した。

保育者を対象とした自己評価の試行の結果、保育者が本評価ツールの目的を踏まえて活用すれば、目標を達成できることが示された。

(5) 研究成果の社会的意義

「食育実践力」の評価の視点を見出し、評価ツールを開発したことで、本研究の目標はほぼ達成できた。開発した「食育実践力」評価ツールは、保育者自身に食育実践の必要性や知識の気付きを促す効果が見られたため、学びの基盤を作るツールとして活用できる。園全体で活用することにより、食育実践の必要性や方法を共有でき、同僚性を高め、日々の保育から得る経験知の質向上が期待できる。これは、保育者個々の自己研鑽を強化する環境作りともなるだろう。本評価ツールは、効果的な研修プログラム開発に活かせるものであり、社会的に意義深いと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 進藤容子, 中井清津子, 横島三和子	4. 巻 3
2. 論文標題 食育実践力評価ツールの開発 - 保育者による自己評価の試行 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 乳幼児教育・保育者養成研究	6. 最初と最後の頁 47-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 進藤容子, 中井清津子	4. 巻 5
2. 論文標題 保育者の属性別にみる食育実践関連因子の傾向 - 保育者を対象とした食育実践及び食生活, 食知識の実態調査から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保育者養成教育研究	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 進藤容子, 中井清津子	4. 巻 36
2. 論文標題 保育者を対象とした食育実践及び食生活, 食知識に関する実態調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 相愛大学研究論集	6. 最初と最後の頁 21-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 進藤容子, 中井清津子	4. 巻 4
2. 論文標題 保育者の食育実践に影響する要因の関連 - 保育者を対象とした食育実践及び食生活, 食知識の実態調査から -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育者養成教育研究	6. 最初と最後の頁 47-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子, 横島三和子, 原口富美子
2. 発表標題 保育者の食育実践力評価の視点(3)
3. 学会等名 日本保育学会第75回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子, 横島三和子, 原口富美子
2. 発表標題 保育者の食育実践力評価の視点(2)
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子, 横島美和子, 原口富美子
2. 発表標題 保育者の食育実践に必要な指導力について(5)
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 進藤容子
2. 発表標題 保育者の食育実践力評価の視点(1) - 食育実践力成長プロセスの考察 -
3. 学会等名 第8回日本食育学会学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子, 横島三和子, 原口富美子
2. 発表標題 保育者の食育実践に必要な指導力について(4) - 保育者対象の「保育者に求められる食育実践力に関する調査」結果から -
3. 学会等名 日本保育学会第72回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子
2. 発表標題 保育者の食育実践に必要な指導力について(3) - 食育研究者対象のインタビュー調査から -
3. 学会等名 全国保育者養成教育学会第3回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 進藤容子, 中井清津子, 横島三和子
2. 発表標題 保育者の食育実践に必要な指導力について(2)
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 進藤容子
2. 発表標題 保育現場での食育の思いと求められる保育者の資質について - 施設長へのインタビューを通して -
3. 学会等名 日本食育学会第5回学術大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 進藤容子、中井清津子、横島三和子、原口富美子
2. 発表標題 保育者の食育実践に必要な指導力について(1) - 保育者対象の食育力調査項目の検討 -
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	原口 富美子 (Haraguchi Fumiko)	認定こども園湊川短期大学附属北摂中央幼稚園・園長	
連携研究者	中井 清津子 (Nakai Setsuko) (00738726)	びわこ学院大学・教育福祉学部・教授 (34206)	
連携研究者	横島 三和子 (Yokojima Miwako) (20584717)	大阪人間科学大学・人間科学部・准教授 (34435)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------